半分幻の使い魔

ともよよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
半分幻の使い魔

【Ｎコード】
Ｎ６３６９Ｘ

【作者名】
ともよよ

【あらすじ】
使い魔召喚の儀式当日、どんな魔法を使っても爆発してしまう少女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール（以下ルイズ）はやはり失敗していた。そしてようやく成功し、現れたのは……半分人間で半分幽霊の半人前？はたしてこの先ルイズどうなってしまうのか？　初めまして、この小説は「ゼロの使い魔」と「東方Ｐｒｏｊｅｃｔ」とのクロスオーバーとなっております。また、「あの作品のキャラがルイズに召喚されました@Ｗｉｋｉ」と二次創作の影響が濃くなっております。オリジナル設定や独

自解釈も入れていくつもりです。そのため、もともとわかりにくい文章がさらにわかりににくくなると思いますので、どうかご容赦ください。

プロローグ（前書き）

初めまして。小説を書くのは初めてですので、上手く書けているかがわかりません・・・そのためご意見・要望をお待ちしています。

プロローグ

「妖夢ー？まだなのー？」
「少々お待ちください幽々子様。ただいまお持ちいたします。」

ここは幻想郷。
結界で覆われた箱庭のようなこの世界は、失われていった「モノ」で埋め尽くされている。
「日本の原風景」をイメージしろ、と言われた人の頭の中をそのまま映し出したようなこの世界にはその反面、「ありえないモノ」も存在する。
空を飛ぶ人間、魔法、幽霊、妖怪、はてには神様まで、もうなんでもアリの世界なのである。

そんな「ありえないモノ」の一角である冥界にはあるお屋敷がある。白玉楼。文人が死ねばたどり着くとも言われるこの屋敷の主、西行寺幽々子は今か今かと待ち望む物があった。

「ふぅ…持ってきましたよ幽々子様」
「遅いわ妖夢。世間では速さが求められていると言うのに、まったく妖夢ときたら」
「いやさすがにこんなものを速く運ぶのは無理ですよ。私が筋骨隆々になってもいいんですか？」
「あら、それはそれで見てみたいわね」
「こちらからお断りします」
そう言って怪訝な顔をしているのはこの屋敷の剣術指南役兼庭師兼、魂魄妖夢である。
人間と幽霊のハーフである彼女は、剣術を扱う程度の能力を持つため、常人を逸脱した行動をとることもできるが、それでもやはり女

の子。はっきり言ってガタイのいい体に憧れなどないのであった。
そんな顔をする妖夢に、冗談よ、と言って幽々子は目の前にある黒い箱を見つめた。
「本当にこんなものが役に立つのかしら？」
「紫様の話では、遠くの風景が映るとの話でしたが」
そう言われた幽々子は数日前の宴会での会話を思い出す。

〜〜

「外の世界の物が使えるようになった？」
目の前にいる友人、八雲紫はそれを聞いてうふふと笑った。
八雲紫。幻想郷を作り、多くの妖怪から尊敬と畏怖の念を送られる妖怪である。
胡散臭さの塊とも言うべき彼女が自慢げに話をすることはやや珍しい。友人に話すくらいの価値があるくらいのことなのだろう。そう思い、幽々子は続きを待った。
「少し前に外の世界からある物が送られてきたのよ。向こうでは使えなくなった様だけど、こっちじゃまだまだ現役よ。少し改造して、ようやく完成したって訳」
「あらあら。一体どんな物なのかしら？」
「それは見てからのお楽しみよ。とりあえず、遠くの風景が見えると言っておこうかしら。まあでも、道具屋に話をつけるべきかもしれないわ。客が増えるとね」
どうやら何かアイテムが必要らしい。明日にでも妖夢に取りに行かそう、そう思ったあたりで今夜の宴会はお開きとなった。
次の日にさっそく妖夢に取りに行かせた訳だが、帰ってくるなり安く買えたと自慢していた。どうやら真面目に買ったらしい。大方二束三文の物を二倍以上の値段で売りつけられたのだろう。まだまだ

修行が足りないわね、と思った幽々子であった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「妖夢」
「なんでしょうか幽々子様」
「後でおもしろい話を聞かせてあげるわ。ある魔法使いが買い物に出かけた話よ」
「？？？　なんだかよくわかりませんが楽しみにしておきます」
「そんなことよりこれはどうやって使うのかしら？」
そんなことって、と妖夢がつぶやいた気もするが、幽々子は話を進める。
「道具屋から何も聞いてこなかったかしら？」
「あ、はい。どうやらその部分を押すと使えるようです」
そういって妖夢が指差す場所を幽々子はためらいなく押した。
「えいっ」
パチン、と音を立てて目の前の箱——ようするにテレビである——の前面が淡く光りだす。しかし特に変わった様子もない。
「おかしいですねぇ」
「いやだわ妖夢。不良品じゃない。今すぐ新しいのを持ってきなさい」
「えぇー」
と、妖夢がげんなりした時であった。

「ハロー。聞こえるかしら？」

「!?」
「へぇ…これはこれは」
突然テレビが喋った、と思ったら、そこには紫の姿があった。

「実験成功、ってとこかしら」
「どうしたんですか紫様！？そんなに薄っぺらくなられて…」
「遠くの風景が見えるねぇ…毎回見えるのが貴女の部屋じゃあ、刺激が足りないわよ」
「私の話は無視ですか…」
「そのアイテム（テレビ）がある場所ならどこでも映るわよ」
「わっ！」
その声は幽々子の真後ろから聞こえた。境界を操る程度の能力を持つ彼女にとって、瞬間移動など朝飯前なのだ。
「ほら、こうすれば……っと」
するとこんどは眼鏡の店主が経営する店の中が映し出された。続いて無縁塚。そしてまたもや紫の部屋えとテレビは場面を変える。
「なかなか便利じゃない」
「これさえあれば冬にずっと家に居られるわ」
なるほどそう考えれば便利かもしれない。特にあの巫女にはウケがよさそうだ。貴女らしいわね、と言った幽々子に紫は返そうとした。しかしその言葉は幽々子に届くことはなかった。

「これｓ「幽々子様！紫様！大変です！急に光りだしました！！」」
「――っ！？」

何事か、と振り向いた視線の先にあったのは、先ほどとはうって変わって光り輝くテレビの姿であった。
「これも便利な機能？」
「おかしいわねぇ…問題はないはず……！！」
「どうしたの？」
「これはこれは…大変なことになったわよ……くすくす」
「？？？どういうことですか？」
そう問われた紫の顔は妖しく笑っている。どうやらなにか面白いことがあったようだ。

「今このテレビはねぇ……異世界に繋がっているのよ！」
「異世界ですか！？」
「異世界って…外の世界とは違うのかしら？」
幻想郷は結界によって覆われている。そのため結界の外側を、便宜上「外の世界」と呼んでいる。
そしてその存在は一部の者に知られており、ここにはその内の二人が存在していた。
「どうやら違うみたいね。その光の先の世界では、魔法が一般化されているわ。科学もあまり発展していないみたい」
「あら、遠足の準備はできてないわ」
「私もよ。残念ながら関係者以外立ち入り禁止みたいだし」
「あらら……それは困ったわねぇ。……と言うわけで妖夢、準備はいい？」
「……はい？」
「だーかーらー、準備はできた？と聞いてるのよ？」
「えっと、お聞きしますが、なんの準備ですか？」
「そんなもの、異世界探索の準備に決まってるじゃない」
「えぇー！？私が行くんですか！？」
「当然よ。そんな面白そうな場所、放っておけないじゃない」
「じゃあ幽々子様が行けばいいじゃないですかー」
「嫌よ」
「えー」
「いいから行ってきなさい。いざとなったら紫が助けてくれるわよ」
「本当ですか？って居ないじゃないですか！」
「大丈夫よ、さあ行くのよ妖夢！」
「って押さないでください！わ、わわわ、わぁーーーーーーーーーーー！！」
このようにして妖夢は、異世界への扉をくぐったのであった……

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～

「よかったの？きっとしばらく帰ってこないわよ？」

「あら、心配してくれるの？」

「貴女が、よ。まったく…勝手に約束しちゃって…異世界へ行くのは面倒なのよ？」

「いい運動になるわよ。それに妖夢なら大丈夫よ。

たぶん、ね」

「まぁ、昔から言うものね」

「「『かわいい子には旅をさせろ』ってね」」

白玉楼には、しばらく笑い声が聞こえていた。

第一話（前書き）

前の話を見返すと間違いが多くて悲しくなりました。徐々に直していきたいです。
と言うわけで本編スタートです。いきなりオリ設定・改変とかでますので、苦手な方は「戻る」推奨です。

第一話

「宇宙のどこかにいる、わたしの僕よ！」
ここは異世界、ハルケギニア。
ハルケギニア大陸を中心とし、いくつかの国に分かれるこの世界では、魔法と言うものは一般常識として生活に根付いていた。魔法を扱える者はメイジと呼ばれ、そのほとんどは貴族である。またそうでない者は平民として貴族に従属していた。
「神聖で美しく！そして、強力な使い魔よ！」
そんなハルケギニアにある小国、トリステイン王国。その国にあるトリステイン魔法学校で大声で呪文を唱える女生徒がいた。彼女の名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。教師が見守る中、彼女は呪文を唱え終えた。
「私は心より求め、訴えるわ！…我が導きに、応えよっ！」
そして――――

「さすがゼロのルイズだな！」
「『サモン・サーヴァント』すらまともにできないのかよ！」
「次成功するか賭けようぜ！」
「賭けにならねーよ…」
爆発の後に残るのは、使い魔ではなく嘲笑と侮蔑の言葉だけ。本日何回目かすらもわからない失敗に、ルイズはこれまた何度目かわからない叫び声を上げた。
「何で！何で何にも出てこないのよ！」
今執り行われているのは、使い魔召喚の儀式。メイジの手となり足となる使い魔を召喚するだけでなく、この学院の進級試験も兼ねた大変重要で神聖な儀式なのだ。そこで呼び出されるのはサラマンダーであったり、巨大なモグラや竜の幼生など様々である。生徒はみな無事に使い魔との契約も終え、お互いの使い魔を見せ合っては自

慢をしたりしていた。
だだ一人を除いては、である。

「ミス・ヴァリール……申し訳ないが、次の授業が始まってしまう。」
そう言ったのは教師ジャン・コルベールだ。
「そんな！私はまだ使い魔を召喚していません！」
しかしルイズとて簡単に引き下がるわけにはいかない。貴族の中の貴族、ヴァリエール公爵家の娘だというのに、ルイズは魔法が使えないでいた。いや、それよりもっと質が悪いと言うべきであろう。なぜなら、ただ失敗するだけでなく必ず爆発が起きてしまうのだ。そんなルイズについた二つ名は「ゼロ」。ルイズとしては、この不名誉な二つ名を何としても取り消したいところであった。そしてこの使い魔召喚の儀式は、千載一遇のチャンスなのである。
「しかし時間は時間だ。それに君は十分に時間をかけたじゃないか。それに他の生徒たちは持ちくたびれてしまっているよ。だからね……」
「っ……」
やはり自分には魔法なんて使えないのだろうか。いままで人一倍努力してきたのはなんだったんだろう。そんなことを考えながらうつむくルイズに、コルベールはさらに言葉を続ける。
「だからね……もう一度だけ挑戦してごらん？」
「！！」
ハッとして顔を上げるルイズに、コルベールは笑いかける。
「私だって生徒の悲しむ顔は見たくないからね。それに、私は君が今までしてきた努力を、他の人よりは知っているつもりだよ、ミス・ヴァリエール。さあ、私に君のメイジたるところを見せておくれ」
「はい！ありがとうございます！」
その顔に今までにないような自信をのぞかせつつ、ルイズはもう一度呪文を唱えにかかった。

（大丈夫。次こそ成功する）
またかよ、と何人かが文句を垂れるが、全神経を集中させるルイズの耳には届かない。
（コルベール先生にも励ましてもらったんだもの）
彼が自分のこともしっかりと見ていてくれていたとは知らなかった。わざわざ自分のためだけにチャンスを与えてくれたのだ、ここで成功しなくては、とさらにルイズは自分に言い聞かせる。
（もう「ゼロ」なんて呼ばせない！いままでにないくらい素晴らしい使い魔を召喚して見せるわ！）
自分の誇りにかけ、ルイズは杖をふるった。
（お願い――――）

これまでよりも大きな爆発が起き、何事か、とほとんどの生徒はそこに注目した。
「まさか成功したのか！？」
「そんな馬鹿な！」
「おい、煙の中に何かいるぞ！」
確かに煙の中に何かいる。
「私のっ……私の使い魔はっ！？」
ルイズも必至になって目を凝らす。そしてその中から聞こえたのは――――

「うう……ひどいです幽々子様。あんなに押さなくてもいいじゃないですか……」

人間の声だった。
そして煙が晴れ、そこにいたのは間違いなく人間の少女だった。

は？と誰の頭にも疑問符が浮かび、いち早く我に返ったルイズはコルベールに向かって叫ぶ。
「ミスタ・コルベール！！やり直しを要求します！！」
「残念だが、それはできません。」
「どうしてですか！彼女は人間です！それも平民の！！」
「ダメです。これは神聖な儀式なのでやり直しは認められません。さあ、早く『コントラクト・サーヴァント』を彼女に。」
「そんな……」
ルイズはまだ何か言いたそうだったが、やがて諦めたのか、嫌そうな顔をしながら少女に近づいた。

「アンタ誰よ？」
そう言いながら、目の前の少女の恰好を見る。緑を基調とした服に、髪には大きなリボン。そして少女には似つかない大きなサーベルのような物を持っているが、それを扱えるようには見えない。
そしてなによりはっきりとわかったことは、彼女がメイジでないことだった。
メイジは剣を使わない。それに目の前の少女はマントをしておらず、杖を持っているように見えなかった。
「はあ、私は魂魄妖夢と言いますが、えっと、あなたは？」
「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。あとあなた平民でしょ？何よその口のきき方は！私は貴族なのよ！」
「へ、平民？すみませんが何が何やらさっぱりで……」
「もういいわ！いいから感謝しなさいよね！」
「？？　何がですか？」
「こんなことをしてもらえるなんて、滅多にないことなんだから」
そう言ってルイズは妖夢に一歩近づき、
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔とな

せ」
呪文を唱え、儀式である口づけを交わした。
「！？」
予想していた以上に妖夢は驚き、口をパクパクしている。
「あ……あわわ……」
「何よ。ようやく立場が分かったわけ？これからは――――って人の話を聞きなさいよ！」
しかし妖夢は反応を見せない。よく見ると顔が真っ赤にしながら何かを呟いていた。
「なにブツブツ言ってんのよ」
「……」
「？　何？」
「で、出会っていきなり……しかも人前でするなんて……」
「……え？」
そう言って妖夢は目を回してしまった。ルイズも妖夢の顔が赤い理由に気がついたようだ。周りを見渡せば、いままで囃し立てていた男子生徒たちは皆だまってそっぽを向いている。よく見るとその大半は少し顔を赤らめていた。
う、とルイズも契約の瞬間を思い出したのか頬を朱に染める。
「ミ、ミス・ヴァリエール。『コントラクト・サーヴァント』は一回で成功したようだね。それにヨームさんのルーンは興味深い。スケッチさせてもらうよ。」
そう言うコルベールも顔が赤い。
（うう…。こんなことになるんだったら後で契約するんだったわ…）
そんなことを考えているうちに、妖夢に現れたルーンをスケッチに写し終えたコルベールがようやく儀式終了の声を上げる。
「ではみなさん、いろいろありましたがこれで儀式は終了です。各自解散してください。あとミス・ヴァリエール、彼女は私が医務室に運んでおきますね。目を覚ましたら連絡しますよ」

「あ、はい」
生徒はみな「フライ」を唱え、あるいは自らの使い魔にまたがり、広場を去っていく。もちろんルイズは歩いて、だが。
「おい！お前は歩けよゼロのルイズ！！」
「相手が平民だったから契約できたんだ！」
「でもあの一瞬はよかったなあ……」
「確かにそれだけは言えてたな。」
皆口々に先ほどの感想を残しながら去っていく。いつもなら言い返すルイズだったが、さすがに疲れたようだった。
「もう、これからどうなるのかしら……」
彼女にしては弱気なつぶやきを残しつつ、ルイズもまた、広場を去った。

第一話（後書き）

こんな感じになりました。半霊に対してなんの反応もなかったのは、ルイズたちには見えていないからです。そのあたりは次の話、と言うことでよろしくお願いします。
ご意見、ご要望お待ちしております。

文章を一部変更しました。幻想郷では男性同士、女性同士の恋愛と結婚は普通にあること、ということにしています。そのため前の「女の子同士で」のくだりを「人前で」に変えています。

第二話（前書き）

続きです。
今回は妖夢についてのオリ設定とかの話です。

第二話

どうやら妖夢が目を覚ましたらしい。連絡を受け取ったルイズは、医務室へと向かった。
「入るわよ」
「あ、はい。どうぞです」
どうやらすっかりよくなったらしい。さっそく使い魔について説明しようと口を開きかけたルイズに、いきなり妖夢が謝りだした。
「あの、先ほどはすみませんでした」
「何がよ？」
「いやぁ……お見苦しいところを見せてしまったなぁと」
「ああいいわよ別に。それに私もいきなりで悪かったわ。それよりあんたは私の使い魔になったのよ」
「えっと、聞きたかったのですが、使い魔っていうのはなんなんですか？と言うかここはどこですか？」
「ここはトリステインの魔法学院よ。そしてあんたは使い魔の儀式で不本意にも私に呼び出されたのよ」
「トリステイン？魔法学校？すいません、わかるように言ってください」
そんなことを言う妖夢にルイズは頭をかかえた。どうやらとんでもない田舎者を呼び出してしまったらしい。
「そんなことを言ったってトリステインはトリステインよ。それとも何？ゲルマニアとかガリアから来たって言うの？」
「？？　私は幻想郷の出身ですが……あ！　そういえばここは異世界でしたね」
『異世界』、妖夢の口から発せられたこの単語に、ルイズは疑問を覚えた。
「困ったなあ。でも言葉も通じるし大丈夫かな？」
「ちょ、ちょっと待ちなさい！」

「どうしました？ルイズさん」
「異世界って何よ！？貴族に嘘をつくなんて失礼よ！」
「嘘と言われましても…事実は事実ですし……」
ルイズは再度頭をかかえる。もしかして私は頭がかわいそうな人を呼んでしまったのではないか、と不安がよぎる。
「しょ、証拠を見せなさいよ、証拠を！じゃないと信じられないわ」
「証拠ですか？うーん。急に言われても……」
「ほらやっぱり！さあ、どこから来たのかはっきり言いなさい！」
「だから幻想郷ですよ」
「だーかーらー！」
どうやらこのままでは埒が明かないと感じ取ったルイズは、異世界のことは頭の隅に追いやり、話を進めた。
「もういいわ。そういうことにしといてあげる」
「絶対信じてませんね」
「もうその話は終わり！それよりよく聞きなさい。使い魔っていうのにはね、三つの役割があるのよ。まず一つ目は主人と視覚や聴覚を共有できる、というものよ。人間とできるのかしら」
そう言って念じてみた。すると確かに見える。見えるのはいいが、なぜか二人を見下ろすように見える。それは何度試しても同じだった。
「なんかあんたの上のあたりから見えるんだけど」
「あ、半霊のほうに反応するんですね」
またもや知らない単語が出たことは、ついにルイズの我慢の限界を超えた。
「もー！なんなのよさっきからいったい！全部説明しなさいよ！」
そんなルイズの剣幕に押されながらも、妖夢は自分について説明する。
「やっぱり見えてないんですね。半霊というのはコレのことですよ」
ふん、と霊力をいつもより半霊に込める。そして現れた半霊を見た

瞬間、ルイズは絶叫した。
「幽霊！？　あ、あ、あ、あ、あんた、し、死んでたの？」
「失礼ですね。しっかりと生きてますよ」
「でも幽霊なんでしょ、これ！」
「ええ」
「やっぱり死んでるじゃないのー！！」
「ああ、しっかり！」
うう、と倒れそうになるルイズを、慌てて妖夢は支える。
「大丈夫ですか？」
「大丈夫じゃないわよ。まさか幽霊だったなんて……」
「だから違いますよ。いいですか、私は半人半霊なんです」
「はん……じん……？」
「要するに私は半分人間で半分幽霊なんですよ。だから死んでないし、生きてもいる。まあ裏を返せば半分死んで半分生きているとも言えますが」
ようやく落ち着いてきたようだ。
「襲ってきたりしない？」
「安心してください。半霊は私そのものです。むやみに人を襲ったりしませんよ」
「よかった～」
ふう、と安堵の声をルイズは上げる。元気を取り戻したようだ。そして顔には満面の笑みを浮かべている。
「ってことはあんたは人じゃないってことよね？」
「そうですね。まあ半分だけですが」
「うふふふふ。やったわ！」

その言葉を聞いて、ルイズは飛び上がらんばかりに喜んだ。
（これで「ゼロ」なんて呼ばれずにすむ！しかも半人半霊など聞いたこともないし、もしかしたら本当に異世界からやってきたのかも。最初は平民なんてついてないって思ったけど、これなら文句はない

わ！）
そしてある「事実」を改めて確認する。
（ちゃんと魔法が使えた……私はついにやったのよ！！）

ハッ、と我に返ると妖夢が心配そうな目でルイズを見ていた。
「あの……本当に大丈夫ですか？」
「大丈夫よ。じゃあ残りの役割について説明するわね。第二に、秘薬の材料を探して採集してくることなんだけど、できる？」
「場所と物を指示してもらえれば、ある程度の物は探せると思います。」
「最後は主を守ること……これにはあんまり期ｔ「任せてください！」……ええ？」
自信たっぷりに宣言する妖夢に、ルイズは困惑する。たしかに大きな剣を持っていたが、力も強そうには見えない。なにか能力でもあるのかという質問にまたもや妖夢は自信たっぷりに言った。
「私の能力は剣術を扱う程度の能力です。それにこの楼観剣と白楼剣には切れないものなどあんまりないのです！」
「あんまりって……それに一本しかないじゃない」
「白楼剣は普段は半霊にしまっていますからね。それに実はむやみに使ってはいけないのです。それで、その三つ以外に仕事はないのですか」
「えっと……身の回りの世話とか？」
言ってしまってからルイズはしまった、と思ったこれは彼女が人間だと思っていた時に考えたもので、本当は使い魔の仕事でもなんでもないのだ。しかし妖夢はあっさりとそれを受け入れた。
「世話ですか、いいですよ」
「いいの！？」
「？　そんなに驚かなくても」
一切嫌がるそぶりを見せずに自分の使い魔になるという妖夢に、ルイズは逆に不安になった。

「ねえ、本当に私の使い魔になってくれるのよね？」
「どうしてそんなことを聞くのですか？それに契約もしましたよ？」
「だって……」
「大丈夫ですよ。元々使用人みたいなことをしてましたし。それに……」
「それに？」
「それに、多分こうなることをわかって幽々子様は私をこちらに送ったんだと思います」
「ユユコって誰よ」
「幽々子様は私が仕えている屋敷のお嬢様です。きっとルイズさんが困ったことになることがわかっていたんですよ。それに私のためでもあるんです」
「どうして？いきなり送るなんてひどいじゃない」
もはやこれでは使い魔にしたくないかのような言い方だ。なぜそんな言葉を投げかけたのか、彼女自身もわからなかった。ただ自然と口が開いていた。そんなルイズの言葉に、本当ですよね、と小さく妖夢は笑い、こう続けた。
「たしかに私は幽々子様に振り回されているだけですが、それが私のためにならなかったことは一度もありません。ですから、今回もきっと私のことを考えてくれているのだと信じています」

（あ……）
その言葉に偽りなどなかった。そしてその言葉は、ルイズにある気持ちを芽生えさせる。
（私もヨームに心から信頼されたい）
それはひどく簡単なことであったが、強くルイズの心に響いた。
（使い魔から信頼を受けられないメイジが、最高のメイジであるるわけがないわ。私は心のどこかで、ヨームのことを都合のいい道具か何かと勘違いしてたのね）

「……ありがとう。ヨーム」
「？？　私は何もしていませんよ」
「ううん。あなたの言葉で、メイジとして私はどうするべきかわかった気がするの。私は、あなたの信頼に値するメイジになってみせるわ。だから、使い魔として私と共にいてほしいの」
ルイズの今までとは違う、誇りあるメイジとしての言葉に妖夢は驚くが、嬉しそうに笑って答えた。
「わかりましたルイズ様。これからよろしくお願いいたします」
「ええ、よろしくね」
単なる主従関係ではなく、パートナーとしての、新たな絆が生まれた瞬間だった。

〜〜〜

「あ、ところで半霊は見えっぱなしでいいんですか？」
「？　別にいいんじゃない？」
「いや、誰か倒れたら困るなー、と」
ここハルケギニアでは幽霊にあまりいいイメージを持っていない。ルイズはいいとしても、他の者が見たら大騒ぎになってしまうだろう。
「確かにそうね……普段は見えないようにしておいて」
「わかりました」
「…………ってこれじゃあ見た目は平民のまま！？」
「あ……」

ルイズが認められる日は、まだまだ遠そうであった。

第二話（後書き）

いかがでしたでしょうか。
いきなりルイズが成長しすぎた気もしますが、やっぱり人以外を召喚できたらこんな感じだと思います。

ご意見、ご要望お待ちしております。

第三話（前書き）

続きです。
この作品の妖夢は二次創作によくある、屋敷のこと全般を任されているタイプです。そのため家事なんかが得意です。

第三話

「あら……？」
学院で働くメイド、シエスタは水汲み場に見慣れない姿を見つけた。
（もしかして、ミス・ヴァリエールの使い魔になったっていう平民の人って、あの人のことかしら？）
使い魔の儀式で平民を呼び出した、という噂は瞬く間に広まり、この学院の人間でそれを知らない人間はほとんどいなかった。
（何をしてるんだろう）
そう思ったシエスタは近づいて声をかけた。

「あの…」
「あ、初めまして。この学院のメイドさんですか？」
「はい。シエスタっていいます」
「私は魂魄妖夢です。妖夢と呼んでもらって結構です」
「コンパクヨーム？変わったお名前ですね。えっと、ヨームさんはここで何を？」
「何って、洗濯ですよ」
手元にあるのは洗濯板と服。どう見ても洗濯をする格好である。なぜそんなことを聞くのかわからない、といった様子の妖夢に、シエスタは聞いた。
「そういった仕事は普通、私たちがするものなんですが……」
「そうなんですか？でも自分で引き受けた仕事だし、それに洗濯は好きですからね」
「でも…」
「大丈夫ですよ。では私はこれで」
そう言って妖夢はそそくさと学院の方へ行ってしまった。
（ちょっと変わった人だったなあ）

そんなことを思いつつ、シエスタも自分の仕事に取り掛かった。

「朝ですよ、ルイズ様」
「はえ？そうなの……って誰！？」
「私です。妖夢です。忘れるなんてひどいじゃないですか」
そんなやりとりをしているうちにルイズもしっかりと目を覚ます。
「うーん。おはよう、ヨーム」
「おはようございます。ルイズ様。ところで、洗った服はどこにしまえばいいのですか？」
「そこの引き出しよ……ってもう洗ったの！？」
ええ、と軽く返事をする妖夢だったが、ルイズには考えられないことだった。
「昨日はけっこう遅くに寝たはずなのに、どんだけ早起きなのよ」
「？　いつも通りですが」
白玉楼にいた時から早くに起きて、屋敷の掃除などをこなす妖夢にとってこの程度はどうということはないことだが、ルイズは驚きを隠せない。
「はあ…なんだか私の使い魔にはもったいないわね」
「そんなことないですよ。さあ、それより早く朝食へ向かいましょう。アルヴィーズの食堂、でしたっけ？」
「そうだけど、なんでそんなことも知ってるのよ」
「朝のうちに調べておきましたから。一日の行動スケジュールとかも完璧です」
ふふん、と胸を張る妖夢に、もはや尊敬の念を持ったルイズだったが、妖夢の言うとおりだ。いそいそと制服に着替えると、扉を開けた。

「あら、おはようルイズ」
合わせたのようなタイミングで近くの扉が開く。その顔を見たルイズは嫌そうな顔をしながら、それでも挨拶を返した。

「おはよう、キュルケ」
「あなたの使い魔って、それ？」
馬鹿にした口調で聞くキュルケ。しかしルイズは冷静に答えた。
「そうよ」
「あっはっは！ほんとに人間なのね！すごいじゃない！」
さすがに少し頭に来たのか、口を尖らすルイズ。
「うるさいわね！いいじゃない別に！それにヨームは本当はにｎ――フガッ！？」
口をふさがれたせいで奇声を発するルイズ。その横では妖夢が慌てた様子でルイズに小声で話しかけた。
（何すんのよもう！）
（ダメですよ、正体バラしちゃ。倒れでもしたらどうするんですか？）
（いいじゃない別に！それにいい気味だわ！）
（とにかくやめてください）
「……何話してるの？」
「わっ！……べ、別になんにもなくってよ、オホホ」
どう見ても何か隠している様子のルイズだったが、とりあえずキュルケは気にしないことにした。
「ふうん……ま、どっかの誰かと違って私は一発で成功させましたけどね～。フレイムー」
「わあ！なんですかこれは！」
のしっ、と姿を現したフレイムを見た妖夢が、目を輝かせる。
「サラマンダーよ。あなた見るの初めて？」
「初めてです！わあー……かっこいいなあ」
そんな姿を見るとまるで子供だ。さっき感じた尊敬の念はなんだったんだろう、と遠い目をするルイズに対し、キュルケは妖夢のことを気に入ったようだ。
「あら、このフレイムのよさがわかるなんてわかってるじゃない。名前はなんていうの？」

「魂魄妖夢と申します。妖夢とお呼びください」
「変わった名前ね。あたしのことはキュルケでいいわ」
「よろしくお願します、キュルケさん」
そんな風にやり取りする二人がおもしろくなかったのか、顔をしかめながらルイズは妖夢にうながす。
「さ、ヨーム。そんなやつなんかと話してないでさっさと行くわよ」
「ああ、待ってくださいルイズ様ー」
ルイズに引っ張られていく妖夢を見ながら、キュルケは呟く。
「あんがい上手くやってるのね。てっきり喧嘩でもしてるのかと思ったのだけれど」
その横顔は、小さな妹を見守る姉のようであった。

「な、何もそんなに急がなくても…」
その小さな体にどんな力があるのかというくらいのスピードで食堂の前までやって来たルイズに、妖夢は質問する。
「何よもう！あんやつなんかと仲良くして！」
「いい人じゃないですか」
「何言ってるのよ。いい、ヴァリエール家とツェルプストー家は代々……ってこの話は長くなるからまたあとで聞かせてあげるわ。それよりヨーム、この食堂には貴族しか入れないから、あなたの食事は厨房でとってもらうことにしてるんだけどいいかしら？」
「もちろんです。食べ終わったらここで待ってますね」
頼んだわよ、とルイズは食堂へ向かい、妖夢は厨房へと向かった。

「すいませーん。ここで食事をもらうことになっている妖夢と申しますが」
「ああ、ヨームさんじゃないですか。ちょっと待っててくださいね」
そこにいたのはシエスタだった。どうやらここで出される食事と言うのは賄い食のことらしい。戻ってきたシエスタの手には、温かいシチューの入った皿が握られていた。

「はいどうぞ」
「ありがとうございます。おお、これは美味しいですね」
一口入れた途端顔をほころばす妖夢に、シエスタも笑う。
「それはよかったです。それにしても、本当に使い魔なんですね」
そう言いながら彼女は妖夢の左手を見つめる。そこにはしっかりとルーンが刻まれている。
「うーん。別になんにも変りませんけどねえ。元々使用人みたいなことをしてたせいかもしれませんが」
「ヨームさんはどこかに仕えていらっしゃったんですか？その、傭兵として？」
「傭兵？違いますよ」
「じゃあその剣はいったい……」
ハルケギニアにおいて剣を持つ平民は多くない。そして持っている人の大半は傭兵である。自分とあまり歳の変わらないように見える妖夢が、そんな物騒な仕事をしていたのかと思いシエスタは聞いてみたが、彼女の予想ははずれたようだ。
「私は屋敷のお嬢様の剣術指南役でしたからね。だからこうして剣を持ち歩いているのです」
「え……じゃあヨームさんは実は相当偉かったんじゃあ…」
「そんなことないですよ。最近はずっと小間使いみたいなものでしたしね。まったく……少しは真面目に剣術に取り組んでほしいものです」
「あはははは」
そう言ってお互いに笑いあった。
「ふう。ごちそうさまでした」
妖夢は食べ終わったので立ち去ろうとした時、シエスタが声をかけた。
「あ、あの……ヨームさん」

「？　なんですか？」
「困ったことがあったらなんでも相談してくださいね。その、同じ平民ですし」
それはずっと彼女が言いたかったことだった。いきなり見知らぬ土地に呼び出された上に、使い魔にさせられていまったのだ。不安なことの方が多いだろう。そんな妖夢に少しでも力になってあげたいと、心の底から思うシエスタであった。
……思ったよりも妖夢がけろりとしていても、である。
「……」
（あ、あれ？いきなりすぎたかな？）
呆けた表情のまま返事のない妖夢にシエスタは不安になる。と、いきなり妖夢はシエスタの手をとった。
「ほ、本当ですか！ありがとうございます！」
「い、いえ。迷惑でしたら別にいいんですけど……」
「迷惑なんてとんでもないです。とっても嬉しいです」
「よかった…」
ふう、と息を吐くシエスタ。どうやらかなり緊張していたようだ。

「これからもよろしくお願いしますね、シエスタさん。では、私はこれで」
「はい。また昼食の時にお会いしましょうね」
飛び上がらんかの勢いでルイズの下へ向かう妖夢を笑いながら見送るシエスタであった。

第三話（後書き）

いかがでしたでしょうか。
本当はもう少し進みたかったのですが、どうにも上手く書けませんでしたので今回はこのあたりで切らせていただきます。こんなペースで大丈夫なんでしょうかね。

ご意見・ご要望お待ちしております。

第四話（前書き）

続きです。
今回はいつにもまして読みにくいかもしれませんのでご注意ください。

第四話

「あれはなんですか？」
「バグベアーよ」
「じゃあ、あの……とにかくあれはなんですか？」
「スキュア」
「じゃあ、じゃあ……」
「もう、珍しいのはわかるけど聞きすぎよ」
ルイズが食傷気味になるのもしかたないというものだ。教室に入った途端、妖夢は目を輝かせてルイズにしつこく質問を続けていた。
「だって、見たこともない生き物ばっかりなんですよ！気になります！」
「気になりすぎよ……」
あきれて席に着いたルイズの後に続いて座る妖夢だったが、その目はまだほかの使い魔を追っている。と、そのとき扉が開いた。
「こんにちは、みなさん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。このシュヴルーズ、こうやって様々な使い魔を見るのが楽しみなのですよ。」
そう言ってあたりを見回すシュヴルーズは、やはりと言うべきかルイズに声をかけた。
「おや、ミス・ヴァリエール。変わった使い魔を召喚しましたね。」
その言葉にどっ、と教室が笑いに包まれる。
「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」
その言葉に言い返そうとしたルイズだったが、それより速く妖夢が立ち上がった。
「な、なんだよ平民！」
「私のことは構いませんが、ルイズ様のことをそんな風に言ってほしくはないものです」

「な、何を言って……ひっ」
妖夢に睨まれた生徒はまるで金縛りにあったのかのように動かなくなってしまった。唖然とするルイズたちにシュヴルーズが声をかける。
「そうですよ、ミスタ・マリコルヌ。お友達を侮辱するものではありません。」
はい、とマリコルヌは小さくつぶやくと席に着く。その姿に満足したシュヴルーズは授業に取り掛かった。

「いったい何をしたのよ？」
「ちょっと半霊を使って脅かしただけですよ。別に問題はありません。それより、授業に集中しないと」
「まったく誰のせいよ……」
ルイズが授業に集中できない理由は妖夢が作ったわけだが、どうにも本人にはその自覚はないようだ。
（なんというか、真面目なんだけど、どこか抜けてるのよね。さて、授業は、っと）
授業の内容は魔法の基礎についてだ。ここハルケギニアには失われた『虚無』の属性を含め、『火』、『水』、『土』、『風』の五つの系統がある。そしてその系統は足すことによって強化されてゆき、一系統だけの者は『ドット』、二系統足せる者は『ライン』、三系統は『トライアングル』、そして四系統は『スクエア』と呼ばれている。
「今日は皆さんに『錬金』の魔法をしていただきたいと思います。まずは手本を見せましょう」
シュヴルーズは小さな石を取り出すと、小さな杖を振り上げルーンを唱えた。すると石は光だし、光が収まったころにはその姿を真鍮へと変えていた。
「！！　み、見ましたかルイズ様！石が金属になっちゃいました！」
「見たわよ。そういえばヨームは魔法を見るのは初めてよね」

「いえ、見たことはありますよ」
「へ？そうなの？」
「ええ。でもこういったものを間近で見るのは初めてです」
（そういえば、ヨームのいた世界――ゲンソーキョーだっけ？にはメイジはいたのかしら？）
「ねえ妖夢、あなたのｓ「ミス・ヴァリエール、私の授業で私語は慎みなさい。」す、すみません」
「そんな暇があるのなら、あなたにやっていただきましょう。さあ、そこの石をあなたの望む金属に変えてください」
「「「「「え！？」」」」」
その言葉に誰もが耳を疑った。ルイズと言えば爆発で有名であり、魔法を使うことはトラブルを引き起こす事に等しい彼女にそんなことを勧めたシュヴルーズに非難の視線を向けるが、シュヴルーズは意に介さず続ける。
「さあどうぞ、ミス・ヴァリエール。皆さんのことは気にせずに。さあ」
「はい」
その言葉にほかの者は顔を青ざめさせる。そして皆一様に机の下に顔を隠した。この後起こる展開が読めているからである。ただ一人残された妖夢はわけがわからなかったが、そのまま呪文を唱えようとするルイズを見続けた。
そして――――

「……」
「え、えーっと、失敗しちゃいましたね……」
「……」
「ま、まあこんなこともありますよ。だから、その……」
「……」
「はあ……」
案の定起こった爆発によって壊れた教室の掃除を任されたルイズと

妖夢だったが、その空気は重い。なんとかしてルイズを元気づけたい妖夢だったが、その行動のすべては無駄に終わった。
「……のよ」
「あ、なんですか？」
ようやくルイズも落ち着いてきたのかと思った妖夢だったが、あることには気づくことができなかった。ルイズの声が震えていることに。
「……ほんとはわかってたのよ。どうせ失敗するって」
「え……」
「見栄を張ってやってみたけど、やっぱり失敗。ふふ、『ゼロ』とはよく言ったものよね。本当に、どうしようもない私……」
「ルイズ様……そんなことないですよ。またやってみたらいいじゃないですか」
ルイズの痛々しい言葉にそう返すことしかできない妖夢。だが、あきらめた表情をするルイズはさらに続ける。
「無駄よ。この一年そう信じてやってきたけど、結果はこの通り。きっと私には魔法なんて使えないのよ、だから……」

「駄目です」
はっきりと妖夢が言い切る。その言葉にようやくルイズは頭を上げる。
「どうして諦めようとするんですか？なんとしても魔法が使いたいと思ってきたのではないのですか？」
「そんなの……そんなのあたりまえよ！どうして私だけ使えないのよ！私が何をしたって言うのよ！私はどうしたらいいのよ！」
せきを切って溢れ出すルイズの本心。それは今まで馬鹿にされ続け、一人でため込んできたものが一気に爆発したものだった。
「私……私は……うっ……ううっ」
ぽろぽろと涙を零すルイズを妖夢は優しく抱きとめる。
「いいんですよルイズ様。確かに今まで成功できなかったかもしれ

ません。ですが、それでも私はいつか必ず成功すると信じています」
「どうして……？どうして言い切れるのよ。私には何の力もない。それに何でもできるあなたにも見合っていないのよ」
「そんなことはありません。私は医務室で聞いたあの言葉をしっかりと覚えていますよ。あれは偽りだったのですか？」
「え……覚えててくれてたの？」
「あたりまえです。あの言葉は、この学院にいる誰のものよりも誠意のこもった言葉でした。そんな人を信じられないわけありませんよ。貴女の目指す誇り高きメイジとは、魔法が上手に使えるだけなのですか？違うでしょう？だったら、十分ルイズ様は一人前ですよ」
「ヨーム……ぐすっ。ありがとう……ううう」
妖夢の胸に顔をうずめ、しばらく泣き続けたルイズであった。

「落ち着きましたか？」
「ええ、大丈夫よ」
「よかったです。これからはなんでも相談に乗りますからね。」
「うん。もう、一人じゃないんだものね」
くすくすと互いに笑い合う二人。お互いを繋ぐ絆がより一層深まった瞬間であった。
「さあ！お昼に急ぎましょう！正直お腹ぺこぺこです」
「もちろんよ。……ってそれが本音じゃないでしょうね！？」
「え？いやぁ……」
「そこは否定しなさいよー！」

～～～
～～～～～～～～～～～～～

「年寄りの楽しみを取り上げて楽しいかね？ミス……」
「オールド・オスマン。貴方の健康を管理するのも私の仕事なのですわ。それと、暇だからといってお尻を撫でるのはやめてください」

「はて、なんのことやら……」
ここは学院長室。この学院の長であるオールド・オスマンとその秘書であるミス・ロングビルは平和な時間を過ごしていた。しかしその平和は一人の男によって破られることとなる。
「た、大変です！オールド・オスマン！」
「なんじゃやね騒々しい。せめてノックくらいはしたまえよ、君」
「そんなことを言っている場合ではないのです！これを見てください！」
男――コルベールが差し出したのは一冊の古い本だった。
「これは『始祖ブリミルの使い魔たち』ではないか。また古臭い文献などを漁りおって。ついでに言うと少々早口すぎていかんよ、ミスタ………なんだっけ？」
「コルベールです！それより、これを見てください！」
コルベールは妖夢の手に現れたルーンのスケッチをオスマンに渡す。それを見た瞬間、オスマンの顔が厳しいものに変わる。
「ミス・ロングビル。席を外しなさい」
さっと出ていくロングビルを確認すると、先ほどまでとは違い真面目な声で話しかける。
「詳しく説明するのじゃ、ミスタ・コルベール」

～～

急いで向かったとはいえ昼食はもう始まっていた。慌てて自分の食事場所へと向かおうとしたとき、妖夢は見知った顔を見つけた。
「あれ、シエスタさん、あんなところで何やってるんだろう」
そこには一人の男子生徒の前で困った風にしているシエスタの姿があった。
「どうしたんですか？」
「あ、ヨームさん……」

「なんだね君は。今は僕がこのメイドと話しているんだよ」
「えーっと、ギーシュさんでしたっけ。それで、何があったのですか？」
妖夢が近くにいた生徒達から聞き出した事実は以下の通りだ。
曰く、シエスタが香水の瓶を拾ったということ。
曰く、それが原因でギーシュの二股がバレ、振られたということ。
そしてシエスタを咎めている今に至る、というわけである。
ことの顛末のあまりのひどさに妖夢は思わず頭を抱えた。
「いやいやいや……どう考えても悪いのはギーシュさんでしょうに」
どっ、と周りにいたギーシュの友人たちが笑う。
「そうだギーシュ！二股かけるお前が悪い！」
さっ、とギーシュの顔に赤みが増す。
「さっき来たばかりの君にそんなことを言われる筋合いはないね。それとも君はそこのメイドをかばうとでも言うのかね？」
「かばうもなにも、シエスタさんは何にも悪くないですよ」
「ふん……ああ、どこかで見たことのある顔だと思ったら、君はあのゼロのルイズの使い魔か。出来損ないの使い魔は出来損ないというわけか。もういい、さっさと行きたまえ」
「今、なんて言いました？」
「ん？」
そこには先ほどまでの温和な表情とはうってかわって冷たい目をする妖夢の姿があった。その目に若干ギーシュは押されつつも、自分の言葉を思い返した。
「もう行けと言ったのさ。それとも何だね？出来損ないと言ったことに腹を立てているのかね？まったく平民のくせにいい身分だな」
「私のことはどう言ってもらっても結構ですが、ルイズ様のことについては私の前では言わないでいただきたいのですが」
「事実じゃないか。それとも何もできない同士傷を舐め合っていｔ
「黙りなさい」」
ギーシュの言葉は妖夢に遮られた。その一言は短かったが、異常な

までに食堂に響き渡った。
「これ以上貴方にはルイズ様の悪口を言わせません」
「ほう、いい度胸じゃないか。いいだろう、貴族と平民の違いを教えてあげるよ。ヴェストリの広場で待っている。準備ができたらきたまえ」
そう言い残してギーシュは去って行く。取り囲んでいた友人たちは一人を残してギーシュについて行った。どうやら見張りをさせるらしい。
「ふう……どうやら決闘ですかね」
「ヨ、ヨームさん……」
「あ、大丈夫でしたかシエスタさん。怪我とかしてません？」
「私のことはいいんです。そんなことより、貴族を本気で怒らしたら、殺されちゃう……」
そうしてシエスタは走り去ってしまった。どうしたものかと一人呆ける妖夢に、騒ぎを聞きつけたルイズが血相を変えて走ってきた。
「あ、あ、あ、あんた、何約束してんのよー！」
「あ、ルイズ様。ヴェストリの広場ってどこですか？」
「行く気満々！？いまならまだ謝ったら許してもらえるわ。早く行きましょう」
「嫌です。ルイズ様は悔しくないんですか？あんな風にルイズ様をけなし続けるなんて……見過ごすわけにはいきません」
その言葉にルイズは胸が熱くなる。妖夢は自分のために怒ってくれている。その気持ちだけで十分な気がした。
「駄目よ、ヨームを傷つけるわけにはいかないわ」
「大丈夫です。私を信じてください」
そう言う妖夢の顔には自信が満ち溢れている。その顔を見たルイズは、妖夢を信じることにした。
「本当に大丈夫なの？いざとなっても私には何にもできないわ」
「ご心配には及びません。私の力を見せてあげますよ！」

「君の結論はなんだね、コルベール君？」
「彼女は伝説の使い魔、『ガンダールヴ』です！あのルーンこそは伝説の使い魔の印、これが大事じゃなくてなんだと言うのです！」
オスマンにまくしたてるコルベール。学院長室では、必死に説明する彼の姿があった。
「少し落ち着きたまえよ」
「すみません。しかし、どうしましょう？」
「ふむ。ルーンがあるというだけで決めつけるのは早計かもしれぬな。何か確認できるようなことでも起これぱのう……」
その時、扉をノックする音が聞こえた。
「なんじゃ？」
「オールド・オスマン、私です。」
「どうした？」
「ヴェストリの広場で決闘が始まろうとしているようです。教師も止めに入ろうとしているようですが、生徒に止められて上手くいっていないようです。」
はあ、とオスマンはため息をつく。
「暇を持て余した貴族は何をしでかすかわからんの。それで、誰と誰が決闘しようというのかね？」
「一人はギーシュ・ド・グラモン」
「グラモン家のバカ息子か……大方女の子の取り合いといったところか。相手は誰じゃ？」
「それが……ミス・ヴァリエールの使い魔の平民ということです」
オスマンとコルベールは顔を見合わせた。
「教師たちは『眠りの鐘』の使用許可を求めていますが、どうしますか？」
「アホか。子供の喧嘩に秘法を使ってどうするんじゃ。放っておき

なさい」
わかりました、と去っていくロングビルの足音を聞きながら、コルベールはオスマンに促す。
「オールド・オスマン」
「うむ」
そう言って杖を振ると、壁にかかった鏡にヴェストリの広場が映し出された。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「諸君！決闘だ！」
おおーっ、と歓声が沸きあがる。ギーシュはバラの造花を振るって歓声に答えた。その動作で観客はさらに盛り上がる。ひとしきり落ち着いた後、ようやく妖夢に気付いたという風にしてギーシュは話しかけた。
「まずは、逃げなかったことについては褒めてあげようじゃないか」
「誰が逃げるものですか」
「ふ、では始めるか」
そう言ったギーシュの手にある造花の花びらが一枚落ちると、それは甲冑を着た女戦士の像になる。
「もちろん、僕は魔法を使って戦わせてもらうよ。僕の二つ名は『青銅』。したがって君の相手はこの『ワルキューレ』がする」
「そうですか。では私もこの楼観剣を使わせていただきますよ」
妖夢が楼観剣を構える。その姿を見て、ギーシュは意外そうな顔をした。
「その剣は見かけ倒しではないということか。まあいいだろう。平民にはちょうどいいハンデだ。行け！ワルキューレ！」
命令を受けたワルキューレは、その青銅でできた手を握り締め、剣を構えたまま動かない妖夢へと突進していく。誰もがギーシュの勝

ちを確信した時だった。

「はああっ！」

気合一閃、妖夢が楼観剣を振りぬく。次の瞬間には、ギギギ、と音を立てて真っ二つになるワルキューレの姿があった。

「何！？」

ギーシュが驚愕の声を上げる。多少は抵抗すると思っていたのだが、まさか一撃で倒されるとは思っていなかったのだった。しかし、驚いたのはギーシュだけではない。

（なんだろう……いつもより体が軽い……？）

妖夢自身、小手調べということで力をセーブして攻撃したはずなのだが、想像以上の結果に驚きを隠せない。

（急に強くなるってことはありえないし、やっぱりこのルーンの影響かなあ？変わった力を感じますしね）

「――――っと」

そんなことを考えている内に新たな攻撃が飛んできたため、妖夢は慌てて距離をとる。そこにいたのは、先ほどと違い7体もの数のワルキューレだった。

「どうやら君を甘く見ていたようだね。さすがに驚いたよ。でも、これだけの数のワルキューレに勝てるかな？」

その様子を見た観客からも声が上がる。

「おいおいギーシュのやつ、本気じゃねえか」

「さすがにそこまでする必要はないんじゃ……」

「でもこれでギーシュの勝ち決定だな」

「さあ、どうする？」

完全に勝った気でいるギーシュ。しかし妖夢の口から出た言葉に、広場にいた全員が注目する。

「わかりました。私も貴方をみくびっていたようです。では、私も『弾幕』で応戦させてもらいますよ」

すっ、と空中に浮きあがる妖夢。その様子に誰もが驚く。
「なんだ！？あいつメイジだったのか？」
「それより、今詠唱無しで浮かばなかったか？」
「ってことは先住魔法！？」
ガヤガヤと騒ぎ出す観客を尻目に、妖夢は空中でその力を発揮する。
「てやあああっ！」
二度三度と振り下ろされる楼観剣。その太刀筋からは、無数の風の刃が飛び出し、ワルキューレへと向かう。その刃に当たったワルキューレは、見るも無残な残骸へと形を変えていた。
「うわあああああああああああああああああああああ」
心の底からの叫び声を上げ、尻餅をつくギーシュ。7体のワルキューレは彼が作り出せるゴーレムの限界だ。それを一撃で倒されたとあっては、もうなすすべがない。震えるギーシュに、一歩、また一歩と妖夢が近づく。
「覚悟はできていますね？」
「ひぃ！」
（やられる！）
そう思ったギーシュはとっさに目をつぶる。しかし、いつまでたっても痛みは襲ってこない。恐る恐る目を開けると、目の前でその刃は動きを止めていた。
「なーんて、冗談ですよ。どうします？続けますか？」
「ま、参った……」
その言葉に満足そうに妖夢はうなずくと、楼観剣をしまう。そしてギーシュの方を向いて言った。
「あ、そうそう、これからはルイズ様のことを馬鹿にしないでくださいよ」
「もちろんだ」
「それから、ちゃんとシエスタさんと泣かせてしまった二人に謝るんですよ」
「……そうだな。あれは僕が悪かった。後でしっかりと謝っておく

よ」
「そうです。ギーシュさんって意外といい人だったんですね」
意外とはなんだ、とむすっとして言い返すギーシュに、妖夢はうふふ、と返す。そして、堪えきれなくなったのか、二人とも互いの顔を見て笑い出した。その様子は、ついさっきまで決闘をしていた者にはまったく見えなかった。

～～

「勝ってしまいましたね……」
「うむ」
『遠見の鏡』ごしに決闘を見届けたオスマンとコルベールはその顔を見合わせていた。
「ギーシュはドットクラスのメイジですが、ただの平民に後れを取るとは思えません。やはり彼女は『ガンダールブ』！さっそく王宮に報告しましょう！」
「その必要はない」
重々しく言い放つオスマン。その顔は先ほどまでのただの明るい老人のものではない。
「ミスタ・コルベール。君はガンダールブについてどれくらい知っているかね」
「始祖ブリミルの使い魔で、主人の詠唱の時間を守ることに特化した使い魔だと聞いています。そして、その強さは千人もの軍隊を一人で壊滅させる程とか…………はっ」
自分で言った言葉に何か気づいたのか、それまで興奮していたコルベールの顔が青ざめる。
「そんなガンダールブを王宮へ連れて行ったらどうなる？もうわかったじゃろう、この件はひとまず保留とする。それにわしには彼女が本当に伝説の使い魔か確信がもてんのじゃよ」

「どうしてです？メイジに勝利する平民などそうはいませんよ」
聞かれたオスマンはその長いひげのついた顎をさする。
「わしが思うに、彼女は自信の実力で勝ったような気がするのだよ。詠唱無しで空中に浮かぶのも考えられんし、それにあの風の刃、あれは魔法とも違う物であったはずじゃ。君は彼女に『ディティクト・マジック』をかけたことがあるかね？」
「初めて会った時に一応確かめましたが、ただの平民となんら変わりませんでしたよ」
「わしもこっそりとかけてみたのだが、その時は並のメイジではかなわぬ程の魔力であったぞ」
「ええ！？」
「彼女が何者なのか、そこから考えないといかんのかも知れんの」
「そうですね」

〜〜

妖夢を迎えに行くルイズも、頭の中は疑問だらけだった。最初は微動だにしない妖夢にハラハラしたが、その後の快進撃には見とれてしまったほどだ。
（怪我もなさそうだし、心配のし過ぎだったみたいね。）
初めはこのように安堵したルイズだったが、しばらくすると謎だらけなことに気付いた。
（っていうかヨームって飛べたの！？それにあの攻撃、ダンマク？だっけ、あんなのが使えたなんて聞いてないわよ！あーもう、わけわかんないことばかりだわ……そういえば、ヨームについて私はなんにも知らないのよね。これはしっかり聞いてみる必要がありそうね）
そんなことを思いながら、妖夢の元へと走るルイズであった。

第四話（後書き）

いかがだったでしょうか。
いやー戦闘シーンって難しいですね。はっきり言って何書いてるかわかんなくなりました。今回の妖夢の攻撃は非想天則とかののB射のイメージです。スペルカードとかも使っていきたいんですが、そのためには描写が……精進します。

ご意見・ご要望お待ちしております。

第五話（前書き）

続きです。

しばらく間が空いてしまって申し訳ありません。これからもペースは適当になると思いますので、そのあたりは大目に見ていただけるとありがたいです。

第五話

「ヨームー！」
「ああルイズ様。来てたんですね」
「来てたじゃないわよ。怪我とかしてない？」
「大丈夫ですよ。ギーシュさん程度の相手に負けるわけありませんよ」
「君って意外と毒舌だね…」
はっきりと言い放った妖夢にギーシュは正直な感想を口にする。
「しかし驚いたな。まさかメイジだったとは」
「そうそう。魔法が使えるんなら最初からそう言いなさいよ」
「？　私は魔法なんて使ってませんよ？」
「「……は？」」
当然のように言う妖夢にルイズとギーシュはポカンと口を開けて聞き返す。
「ちょ、ちょっと待って。飛んでたじゃない。あれは『フライ』の魔法でしょ？」
「そうだよ。それにあの攻撃は『エア・カッター』だろう？それともその剣がマジックアイテムなのかな？」
「ええと、空を飛ぶのはなんというか……その、勝手にできるといいますか……それに弾幕は幻想郷ではポピュラーでして」
「？？　何を言ってるんだい？ダンマク？ゲンソーキョー？それはいったいなnゲフゥ！！」
ルイズの強烈なアッパーにより無理やり黙らせられるギーシュ。幸い観客はほとんど帰っていたため大騒ぎにはならずにすんだようだ。そしてルイズは妖夢の手をつかんで駆け出した。
「ああ、そんなにひっぱらないでー」
以前にもあった光景にデジャブを感じつつ、なすがままにされる妖

夢であった。

自室に到着し、ようやく手を放すルイズ。そしてあたりを見回すと、大きくため息をついた。

「もう！なにやってるのよヨーム！あやうくギーシュにあんたが別の世界から来たってバレるところだったじゃない」

「あ、すみません」

「しっかりしてよ……もう」

（やっぱりどこか抜けてるのよね。さっきはあんなにかっこよかったのに）

だんだんと妖夢の性格に気付いたルイズであった。

「はあ、次から気を付けてよ。それで、結局あの技はなんなの？」

ギーシュが尋ねたことはまさにルイズも聞きたいことであった。妖夢が異世界からやって来ていることを知るルイズだが、詳しくは何も聞いていなかったので今夜はみっちり問いただすつもりである。

「はい。あれは弾幕といって、幻想郷の決闘では必ずこれを使用します。私は自分の能力を応用して弾幕を使っているんです。あと、別にこの剣を持ったからといって使えるわけではありません」

「つまり、あれはヨーム自身の実力ってわけね。…ってちょっと待って、ゲンソーキョーの人はみんなあんなの使えるの！？」

「いいえ、さすがに使える人はほとんどいませんよ。主に妖怪ですね」

「ヨーカイって何？」

「簡単に言うと化け物ですね。でも見た目はあんまり人と変わりませんし、まあ人間を食べたりするくらいです」

「ふーん……って、はあ！？」

突然叫び声を上げたルイズに、妖夢はビクッ、と体を震わせる。

「人間を食べる？ヨームってそんな死と隣り合わせな世界から来てたのね……」

「あはは、大丈夫ですよ。私がそこらの妖怪ごときに遅れを取った

りするわけないじゃないですか。それに何人かは人間に対して友好的ですし、別に主食が人間ってわけでもないし、毎日何人かが犠牲になってるだけですよ」
（やっぱりヨームって毒舌よね……）
笑顔で答える妖夢にルイズは顔をひきつらせつつ、前々から思っていた疑問を口にした。
「ねえ、ゲンソーキョーには魔法は無かったの？」
「いえ、ありますよ。どうしてです？」
「いや、今日の授業の時物珍しそうな顔してたじゃない」
「あれは私の知っている魔法とは全く違っていたからですよ。『錬金』でしたっけ？あれって便利ですね」
「魔法があるってことはメイジもいるんでしょ？『錬金』みたいな初級魔法も使えないの？どんだけ出来損ないのメイジだらけなのよ」
そう尋ねるルイズこそまさしく出来損ないのメイジなのだが、本人はそのことに全く気付いていない。
「幻想郷ではあんまり魔法が浸透していませんからね。むしろ恐怖の対象と言った方が正しいかもしれません。魔法が使えるのは人間ではなく『魔法使い』ですから」
「？　それってメイジのことでしょ？」
「『魔法使い』と言うのは種族のことなんです。私が『半人半霊』であるのと同様にです。まあ何人かは魔法を使う人間もいますが、彼女たちはかなりいろいろ努力してるみたいですね」
「ふーん。ねえ、ゲンソーキョーの魔法にはどんな属性があるの？」
「そうですねえ。星の魔法とか恋の魔法とかですね」
「恋！？なんだかかわいらしい魔法ね。ちょっと使ってみたいかも」
「いやあ……実際はかわいらしいなんてもんじゃないですよ……」
白黒の魔女が使う魔法の一部を思い出し、妖夢は少し顔を青くする。
そんな顔を見ながらルイズはふああ、と小さくあくびをした。
「もうこんな時間ね。今日は色々あって疲れたわ……」
「そうですねえ……」

「誰のせいよまったく……あ、そうそうヨームのその能力はその剣のおかげ、ってことにしておいてね。色々勘ぐられたら面倒だし、マジックアイテムってことにしておいたらきっとわかんないでしょ」
「そうですね。これからはそういうことにしておきます」
そう言っている間に寝る用意をすませた二人はようやく長い一日に終わりを告げた。

今回の決闘騒ぎは学院にある変化をもたらした。一つはルイズをあからさまに馬鹿にする人間が減ったこと、もう一つは妖夢はいったい何者なのか、ということである。ただの少女だと思っていたら、空を飛んだ上、魔法を使ったので、本当はメイジなのではないか、もしかしたら先住魔法なんじゃ…といった憶測が飛び交い、妖夢は毎日のように質問攻めにあっていた。
「いったいどうやって空を飛んだんだ？」
「それはこの剣のおかげでして…」
「じゃああの『エア・カッター』はどうやったの？」
「ですからそれもこの剣で…」
こんなやり取りを毎日のように行われ、さすがの妖夢もまいってしまった。さらには使用人から『我らの剣』、と讃えられ身体の休まない日々を過ごしていた。そんな妖夢をさすがに可哀そうに思ったルイズは、気分転換に街に出ることにした。
「ねえヨーム、さすがに疲れたでしょ。明日気分転換に街に出ましょうよ」
「それはとっても嬉しいのですが、授業があるのでは？」
「明日は『虚無の曜日』で授業が休みなのよ」
「本当ですか！行きましょう行きましょう！！」
飛び上がらんばかりに喜ぶ妖夢。その姿を見て、ルイズも顔に笑みを浮かべた。
さて、妖夢の説明では納得のいかない者も存在することを忘れては

ならない。その内の一人であるキュルケは、妖夢の正体を確かめるために、本来禁止されているはずの『アンロック』の魔法を使って、ルイズの部屋を容赦なく開けた。
「入るわよ、ルイズ。……ってなによー、いないのー？」
入った瞬間から詰め寄ろうとしていたキュルケは拍子抜けした。
（これじゃあ、今日は何も聞けなさそうね）
そう思って部屋を出ようとしたとき、ふと、窓のから二つの人影を見つけた。その人影が誰なのか分かったキュルケはにやり、と笑い、ルイズの部屋を飛び出した。

タバサはこの学院で学ぶ生徒の一人である。もし彼女を知る人間が今の状況を見たら、きっと驚くことであろう。『虚無の曜日』の日には、そのほとんどを読書に費やす彼女が、それをしていないからだ。タバサはあの決闘を実際に見ていた。初めは全く興味はなかったのだが、妖夢が空を飛び、魔法のようなものを使ったところを見たときには、心の底から驚いた。
（あれは、きっと私たちが使っている魔法ではない）
風のトライアングルメイジであるタバサだが、妖夢の実力はあの程度ではなく、自分と同じかそれ以上と考えていた。
（彼女は『ダンマク』と言っていた。もしかしたら何かの先住魔法なのかもしれない）
そんなことを考えているとき、ドンドン、とドアを叩く音が聞こえた。タバサは無視しようとしたが、あまりにも激しく叩くので開けてみると、そこにいたのはキュルケだった。
「あら、珍しいじゃない。自分から開けてくれるなんて」
「少し考え事をいていた」
そう答えるタバサの顔は不機嫌さを隠そうとしない。早く帰ってくれというプレッシャーを無視して続けるキュルケの言葉に、タバサはぴくり、と眉を動かした。
「ふーん。ねえそれより、ルイズの使い魔のことをもっと知りたい

と思わない？」

「まさか空を飛べるとは思ってなかったわ」

「一人くらいでしたら運べますからね。しかしずいぶんと賑やかですねー」

「まあ、ここは一番の大通りだからね。この先には宮殿もあるし。あ、そうそう、スリには気を付けてね。」

「大丈夫ですよ。この中には幽霊退治の専門家でもいるんですか？」

「ははは、どんな貴族でもさすがにそれは無理ね。」

二人が今いるのはトリスティン一の大通り、ブルドンネ街である。道端には露店が溢れており、声を張り上げる商人たちによって大変賑わっている。本来なら馬で三時間はかかるのだが、妖夢の力を使って飛んできたため、あっという間に着いていたのだ。

「どこに行く、って訳じゃないんだけど、別にいいわよね？」

「もちろんです。ああ、人に話かけらることがあんなに辛かったとは……」

そんなことを話しながら二人は街をぐるぐると見て回った。途中二人で商品を見たり、店主を冷やかしたりして過ごしていたとき、突然妖夢が声を上げた。

「む、なんだか強い力を感じますね」

「？　どういうこと？」

「なんだかこの文字に近いような感覚……こっちです。行ってみましょう！」

そういって向かった先にあったのは一軒の武器屋だった。

「ほんとにここ？」

「どうやらそのようです。入ってみましょう」

店主は初めルイズを胡散臭そうにパイプをくわえて見ていたが、その格好に気づき、パイプを置いてドスの利いた声を出した。

「旦那、貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさあ。お上に目

をつけられることなんざ、これっぽちもありませんや」
「客よ。……って言っていいのかしらねこの場合は」
「あながち間違ってない気もしますけどね。ところで店主さん、この店には何か特別な力を持った物は置いていませんか？」
「だから何にも怪しい物なんてありゃしませんよ！」
そのとき、三人しかいない店の中に第四の”声”が響く。
「かかか、いるじゃねーかここに！力を持った剣ならよお！」
「だ、誰！？」
その声に驚いたルイズがあたりを見回す。しかし人影などどこにもなかった。
「誰もいない……？」
「いるじゃねーかここに！おめーの目は節穴か！」
なんと声の主は一本の剣であった。乱雑に置かれた剣の中から声は発せられているのであった。
「やい！デル公！お客様（？）に失礼なことを言うんじゃねえ！」
「それってインテリジェンスソード？」
『デル公』と呼ばれた剣に激怒する店主に、ルイズは当惑した声で尋ねた。
「そうでさ、若奥様。意思を持つ魔剣、インテリジェンスソードでさ。いったいどこの魔術師が始めたんですかねえ、剣を喋らせるなんて……とにかくこいつはやたらと口は悪いわ、客には喧嘩を売るわで閉口してまして……」
「へえ……どうやら私が感じた力はこの剣によるようです」
そう言って妖夢が剣を持つと、先ほどまでの口調とは違い、真剣な声で妖夢に語りかけた。
「おでれーた。嬢ちゃん、『使い手』か。しかも人間じゃないとはな」
「む、やはりただの剣ではないようですね。ところでその、『使い手』と言うのは？」
「なんだったかな……ま、そんなことより嬢ちゃん、俺を買え」

「うーん、欲しいような欲しくないような……それに私はお金を持ってませんしね」
それを聞いたルイズにはある考えがひらめいたようだ。
「ねえヨーム、その剣欲しいの？」
「え？いや別にそういうわけでは」
「いつもヨームには色々してもらってるし、私からのプレゼント、っていうのはどうかしら？」
「いいのですか？」
「いいわよそれくらい。ねえ、この剣いくら？」
「へえ、あれなら金貨百枚で結構でさ。こっちにしたら厄介払いみたいなもんですから。」
「じゃあ買うわ。ヨーム、財布をちょうだい」

かくして買い物を終え、店から出た二人。妖夢は申し訳なさそうに口を開いた。
「すみません、こんなものを買ってもらって」
「別にいいのよ。ところで、この剣はなんていう名前なのかしら」
「おいらはデルフリンガーってんだ。デルフって呼んでくれ」
「しかし変わった剣ですね。さっきは私が人間じゃないって見破られましたし。もしかしたら本物の名刀だったりして」
「こんなにボロなのに？ありえないわ」
その表面には錆が浮き、お世辞にも見栄えがいいとはいえない。はたしてこの剣にはどれほどの価値があるのだろうか？少し真剣に考える二人に、威勢のだけはいいデルフリンガーの声がかけられる。
「ま、細かいことは気にすんな！これからひとつよろしくな、相棒！」

第五話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

やっと主要キャラクターがそろってきた感じですが、はたして全員を上手く動かせるんですかね……少し不安です。

ご意見・ご要望お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6369x/

半分幻の使い魔

2011年12月1日01時49分発行